

目次

● 川とノリオ	いぬいとみこ	5
● 未帰還の友に	太宰治	25
● 立棺	田村隆一	57
● ヒロシマの歌	今西祐行	67
● カプリンスキー氏	遠藤周作	95
● すずかけ通り三丁目	あまんきみこ	113
● あにい	今江祥智	125
● 空罐	林京子	143
● The End of the World	那須正幹	173

一

君が大学を出てそれから故郷の仙台の部隊に入営したのは、あれは太平洋戦争のはじまった翌年、昭和十七年の春ではなかったかしら。それから一年経って、昭和十八年の早春に、アス五ジ ウエノツクという君からの電報を受け取った。

あれは、三月のはじめ頃ではなかったかしら。何せまだ、ひどく寒かった。僕は暗いうちから起きて、上野駅へ行き、改札口の前にうずくまって、君もいよいよ戦地へ行くことになったのだとひそかに推定していた。遠慮深くて律義な君が、こんな電報を僕に打って寄すのは、よ

ほどの事であろう。戦地へ出かける途中、上野駅に下車して、そこで多少の休憩の時間があるからそれを利用し、僕と一ぱい飲もうという算段にちがいないと僕は賢察していたのである。もうその頃、日本では、酒がそろそろ無くなりかけていて、酒場の前に行列を作って午後五時の開店を待ち、酒場のマスターに大いにあいそを言いながら、やっと半合か一合の酒にありつけるといふ有様であった。けれども僕には、吉祥寺に一軒、親しくしているスタンドバアがあって、すこしは無理もきくので、実はその前日そのおばさんに、「僕の親友がこんど戦地へ行く事になったらしく、あしたの朝早く上野へ着いて、それから何時間の余裕があるかわからないけれども、とにかくここへ連れて来るつもりだから、お酒とそれから何か温かいたべものを用意して置いてくれ、たのむ！」と言って、承諾させた。

君と逢ったらずぐに、ものも言わずに、その吉祥寺のスタンドに

算段 工夫すること。手段を考えること。
賢察 本来は相手が推察することを敬う言い方だが、ここでは自分自身に對して用いている。
あいそ 相手の機嫌をとるための言葉やお世辞、振る舞い。

一合 容量の単位。約180mL。半合はその半分。
吉祥寺 現在の東京都武蔵野市東部に位置する地区。
スタンドバア カウンターに椅子をなべただけの酒場。

仙台 宮城県仙台市。
入営 兵士が軍務に就くために、兵営に入ること。
太平洋戦争 第二次世界大戦のうち、アジア・太平洋地域で行われた戦争。1941年12月8日、日本がハワイの真珠湾にある米軍基地を奇襲攻撃して始まった。
電報 文字や符号を電気通信手段で伝送し、紙などに印刷して連絡する方法。
律義 義理堅いこと。実直なこと。

引っぱって行くつもりでいたのだが、しかし、君の汽車は、ずいぶん遅れた。三時間も遅れた。僕は改札口のところで、* トンビの両袖を重ねてしやがみ、君を待っていたのだが、内心、気が気でなかった。君の汽車が一時間おくれると、一時間だけ君と飲む時間が少くなるわけである。それが三時間以上も遅れたのだから、実に非常な打撃である。それにどうも、ひどく寒い。そのころ東京では、まだ空襲は無かったが、しかしすでに* 防空服装というものが流行していて、僕のように和服の着流しにトンビをひっかけている者は、ほとんど無かった。和服の着流しでコンクリートのたたきに躡っている、裾のほうから冷気が這いあがってきて、ぞくぞく寒く、やりきれなかった。午前九時近くになって、君たちの汽車が着いた。君は、ひとりで無かった。これは僕の所謂「賢察」も及ばぬところであった。

ざッざッという軍靴の響きと共に、君たち幹部候補生二百名く

らいが四列縦隊で改札口へやって来た。僕は改札口の傍で爪先き立ち、君を捜した。君が僕を見つけたのと、僕が君を見つけたのと、ほとんど同時にあったようだ。

「や。」

「や。」

という具合になり、君は軍律もクソもあるものか、とばかりに列から抜けて、僕のほうに走り寄り、

「お待たせしました。どうしても、逢いたくてあったのでね。」と言った。

僕は君がしばらく故郷の部隊にいるうちに、ひどく東北訛りの強くなったのに驚き、かつは呆れた。

ざッざッとして列は僕の眼前を通過する。君はその列にはまるで無関心のように、やたらにしゃべる。それは君が、僕に逢ったらまずどのよ

トンビ 男性用のコート。袖がなく、肩に覆い掛けるようにして着るケープがついている。
着流し 男性の和服で、略式の服装。くだけた身なり。
躡っている しゃがみ込んでいる。
防空服装 空襲などのときに身を守る。防空ずきんや、もんぺ、ズック、地下足袋などの動きやすい服装。

かつは 一方では。